

今号は、平成26年夏以降に行われた研究発表会の紹介と事務局を中心とした研修会等を中心に報告します。

＜研究発表会報告＞

「学びの連鎖が生まれる義務教育9年間のカリキュラム研究」

佐賀大学文化教育学部附属小中学校研究発表会

佐賀大学文化教育学部附属小中学校では、標記のテーマをもとに平成24年度より学部・附属小学校・中学校での共同研究を行っており、今年度は研究3年次の発表を行った。平成26年10月10日・11日とそれぞれ小・中学校会場で合計45本の授業を公開し、各教科・領域等の分科会も含めると延べ600名を超える参観者を得て、研究の検討を行うことができた。



本校におけるカリキュラム研究は、カリキュラムを学校教育全般にわたる広範囲のものとしてとらえている。研究を通してめざす児童生徒像を「よりよい未来を志向し、“あこがれ”を抱き続ける、次世代リーダー」とし、義務教育9年間での育成を目指している。

小中学校における各教科・領域等の接続の中心には、本校で作成している各教科・領域等それぞれをつなぐ、カリキュラムデザイン・小中連携プラン・学力デザインがある。9年間で育てる学びの姿を想定した教育活動を行うようになっており、具体的に見れば、パフォーマンス評価を小中共に中心におく教科（社会科・家庭科・外国語活動等）もあれば、ICT機器を活用した授業（国語・算数・体育等）に取り組む教科もある。教科・領域等の特性に応じ、児童生徒の学びにおいて適切だと思われる教育方法の選択を行っていくことも研究の対象としている所である。いずれにせよ、児童生徒の学びの姿を特定の学年を単線的に見るのではなく、複合的・総合的に見ていくことで児童生徒の学習の深まりを図っていくようになっている。



その深まりを小中学校全体でより図るための方策としては、小中学校全教員が分かれて所属する教科等カリキュラム研究部会、特別活動カリキュラム研究部会、道徳カリキュラム研究部会の3つの部会がある。発表会当日は、その成果発表も行った。教科等カリキュラム研究部会では、児童生徒をシンポジストにし、生の声で学校での学びについて語る場を設定し、小中学校での学びの連鎖の具体を児童生徒の声で参観者に届けることができた。特別活動カリキュラム部会では、中学校生徒会活動と小学校児童会活動のつながり、さらには、学級会での児童生徒の姿をもとに討議を行い、これらに関する研究の成果を発表することができた。道徳カリキュラム研究部会では、小中で設定

した「生命尊重」の価値について、それぞれの授業実践をもとに提案を行い、来る教科化も視野に入れた提案を行うことができた。

研究発表会の最後には参観者・保護者・本校生徒も参加し、「脳と学び」というタイトルで、茂木健一郎氏の講演会を開催した。脳科学者としての氏の立場から、自身の経験もふまえ、学校が抱える問題点を具体的に指摘された。また、中学生からの率直な疑問にも真剣に回答される氏の話からは、これからの児童生徒の学びがかくあるべきとの示唆を得ることができた。（文責：浦郷 淳）

「たのしい学校づくり」のために、学習形態や方法へのアプローチを 岐阜聖徳学園大学附属小学校研究発表会

11月21日（金）に、岐阜聖徳学園大学附属小学校で公開研が行われた。私はオープン校の愛知・卯ノ里小を卒業し、今は本学教育学部・成田ゼミに所属している関係で、受付の仕事を手伝いながら附属小の先生方が目指そうとする教育の姿に興味をもって参加した。

校内施設は大変整っていて、各クラスには電子黒板（岐阜市内の小学校の全教室には既に導入済み）と短焦点投影機、ホワイトボードなどが標準装備されており、それに加えて学習材としてデジタル・デバイスが子ども一人一人に配布されていた。個々に調べ学習するだけでなく、それぞれのデジタル・デバイスと教師側の電子黒板とがリンクしていて、子どもの意見が電子黒板へ送信されクラス全体で考えを共有しながら学習を進めていた。

公開研の直前にはアクティブ・ラーニングに関するニュースが商業紙を賑わしたが、教師によるワン・ウェイで講義調の授業とは異なり、子どもの能動的な学習を工夫する必要性が今後ますます重要視されてくるに違いない。公開研では、教室内でのグループ・ディスカッションやディベート、グループワークなどが多用されていて、「学習者が主体になった個に応じる学びづくり」という個別化・個性化教育の理念が、これまでとは異なる手法で甦ってくるのではないかという期待感を抱かせた。

この学校は教育学部附属という強みを生かして、算数・英語・体育・情報などの分野で大学教員が日常的に指導に関わっている。この日も情報の授業は大学教授が直接担当していたし、英語ラウンジ～ English World ～では教育学部や外国語学部の学生やネイティブの先生方の協力で、英語によるコミュニケーション意欲を高める取り組みも続いている。

ただ、新しい時代の個別化・個性化教育の提案が見られると思って臨んだのだが、どこか物足りなさを感じた。一面的な評価で恐縮だが、もう少し独創的な主張があるべきではなかったか。「たのしい学校づくり」と言いながら、「たのしさ」に対する教師の意識は未だ十分には合意できていないように見えたのは残念だったし、教師の授業力の向上だけでコンピテンシー・ベースの学力（資質や能力）は育たない以上、学習形態や方法にもアプローチがなされるべきだろう。



他校より比較的広く設計されている廊下も気になった。子どもたちの作品展示だけで、特筆できるような工夫や仕掛けもなかった。ワークスペースとしてテーブルや椅子を配置すればいいのに、通路としてしか機能していない状況は、これまで嫌になるほど見てきた学校と同じだった。学生の分際で生意気だとお叱りを受けそうだが、附属小教員が文字通りもっと「アクティブ」に各地の優れた実践を学び、果敢に実践していくことを期待したい。(文責：武本 晃宜)

「イッチー学習」の継続と考察

東京都板橋区立第一小学校自主研究発表会

本校が上智大学の澤田稔准教授を専任講師として、1もしくは2教科の単元内自由進度学習の研究に取り組んでから4年が経とうとしている。現在では各学年で年間30～50時間、各学期に一度は実施しており、教員の異動による入れ替わりはあるものの、随分と浸透してきた。本校のキャラクター名にちなんで「イッチー学習」と称し、児童の中にすっかり定着している。昨年度、3年間の取組の成果として研究発表会を、今年度は2月10日に学校が独自に発表会を実施した。

平成23年度、私が校長として着任した頃の一番の課題は、2年後に完成する新校舎はオープンスペース型の教室であり、児童の学力向上のためにどのようにオープンスペースを有効活用すればよいのかを研究することであった。3年間の研究期間であったが、初めの2年間はプレハブ校舎であり、教室の構造は一般的な造りであった。今振り返ってみると、平成23年度の頃はどのような授業をイメージすればよいかすら分からず、教員も試行錯誤の繰り返しであった。



当初悩んだことは、「児童が主体的に学ぶことができるようにするためには、どのような仕掛けが必要であるか」である。そこで、このような研究の先進校の事例を参考に、「①児童の状況をふまえ、複数のコースを用意した学習カードの作成」と「②児童の興味関心を引いたり思わず手にしたくなったりする学習環境の設営」に取り組んだ。「こんな感じでいいのでは？」とほんの少し手応えを感じたのは、平成23年11月、本校の研究主任が行った初めてのイッチー学習である。

2年算数で単元はかけ算。2学級のうち1学級はとても元気な男児がそろっており、年がら年中トラブルがあった。授業においてもノリはよいのだが、全員が集中して取り組むということを苦手としていた。私が印象に残っているのは、その学級のイッチー学習中の児童の様子である。児童は、自分の好きな場所に机を移動していながらも集中していた。誰も一言も声を発することなく。

研究内容にある程度の確信がもてたのは、愛知県石浜西小の授業「〇〇学習」を本校の研究主任と共に参観した時である。当時の本校の教室構造とほぼ同タイプの石浜西小でも「〇〇学習」が成立していた。けっしてオープンスペース型でなくても授業展開ができていたのである。今思えば、プレハブ校舎であった平成24年度末までに中間発表として授業公開を実施しておけばよかったと後悔している。

公開するたびに参観者から様々な意見をいただく。「本当にこの方法で学力がつくのか。」「教員は楽し

ているだけではないか。」等々。逆に「学習環境作成のため、教員の負担が大きいのではないか。」 2月10日に実施したの自主発表会でも同様であった。

今回の自主発表会では、教員の負担感を減らすため、今までの財産である教材をできる限り使うこととしていたが、やり始めてみると児童の実態に合わなかったり、教員のやりがいやこだわりも見られたりして、再作成に取り組んでいる教員が多かった。そのノリはまさしく文化祭準備をしている学生のような。この雰囲気が「チーム板一」を作り上げているのだと教職員にはただ感謝するのみである。

自主発表会にもかかわらず、澤田稔先生が、上智大学名誉教授の加藤幸次先生、岐阜聖徳学園大学教授の成田幸夫先生、東京学芸大学非常勤講師の佐野亮子先生、鳴門教育大学特任講師の佐久間茂和先生と、素晴らしい講師陣を呼んでくださった。成田先生から「こんなに手を入れ過ぎると、教員の負担感が募り、長く続かなくなる。」とご指摘いただいたのが大変印象に残っている。まだまだこれからも改善を図らねばならない。

この研究の最大の成果は、教員一人一人の教材研究力の向上である。イッチー学習の最大の困難点は、発問を教員が発することがほとんどできないことであるから、児童に理解させたいことを、学習カードの中にできるだけ「平易な言葉で」「短く」記載しなければならない。学年の発達段階にあわせ、1枚のカードの文章量を考えることも教員にとっては非常に大切な教材研究である。また、単元全ての教材研究を実施前に終わらせなければならないので、全体を見通した指導計画がきちんと理解できる。

イッチー学習は大変。しかし、やってみる価値は大いにある。その証は、取り組んでいる児童の姿と教員の姿を実際に見ていただくしかない。(文責：中川 久亨)



＜事務局研修会報告＞ 日時 平成26年12月20日（土）上智大学にて

「子どもの意欲的な学びが展開される複数単元自由進度学習

『東泉小学校のマイプラン学習』

元台東区立東泉小学校 教諭 五十子晴美先生



五十子先生のきめ細やかな指導の実践が身近に感じ取れる実践発表であった。

発表後の協議では、なかなか浸透しない自由進度学習について話し合われた。「本校にはなじまない。」という声や「尻込みする教師たち」が多い中「子どもたちが変わる」「成長する」姿を目前にすると教師も変わっていく。実際にやってみるとその良さに気づく教師などが話に上った。そんな教師たちを手助けし良さを浸透していく五十子先生の実践発表であった。

「大学と小学校の協働による学習環境に関する実践的研究」

オープンプランの校舎を活かす校内研修の充実

東京学芸大学非常勤講師 佐野亮子先生

研究者と現場がそれぞれの「～したい」を合致させた研究であった。現場の「せっかくオープンなスペースがあるのだから、授業に上手く生かして使いたい」→研究者「専門的な知識や理論に裏付けられたノウハウを蓄積している」→現場「具体的な手立てや、有効な方法についてよく知らないし、みんなで考える機会もない」→研究者「現場で実際に提案したり、実践できるような機会がない」この二者のニーズが一致したコラボ実践研究であった。研究の実際は、1) 建築の専門家によるレクチャー 2) 空間づくりのワークショップ 3) 学習環境づくりのワークショップ そして複数単元自由進度学習の実践である。その手順もうらやましい限りであった。佐野先生の発表の後、実際に美浜打瀬小学校の小島先生（元研究主任）と石井先生が実践発表をされた。久しぶりに新鮮な実践の感動があった。これも佐野先生と三浦先生（当時美浜打瀬小校長）の協働が実現した結果であろう。若い先生方が実に生き生きと研究に取り組む姿がすばらしいと感じる実践発表であった。（文責：多田）



＜宿泊研修会報告＞ 日時平成27年1月11・12日 場所 熱海 ハートピア熱海

「知識基盤社会を生き抜く子どもを育てる コンピテンシー・ベースの授業づくり」

今研修は、『知識基盤社会を生き抜く子どもを育てる』という本の読書会であった。第4章の執筆者斉藤一弥先生（現横浜市立岸谷小学校校長）に参加していただいた。はじめに第4章の概要説明があり、その後、この章の授業のビデオ視聴があった。次に授業者でもある斉藤先生のお話を聞いてからの協議となった。コンピテンシー・ベースの授業作りの実際から入ったわけである。「こういった授業の経験は、子どもの学習観や授業イメージを変えますよね。・・・逆に言えば子どもは、ひょっとしたら教師も、答えを出せるようになることや手続きを習得することが算数だと思い込んできたのかもかもしれません。（奈須）」



Sー「解釈というのは自分たちで立てた式を見つめ直し、価値づけです。既習経験を総動員してのリフレクティブ（内省的）でクリティカル（批判的）な思考に仕立てていく。この解釈という仕事は適切にできる能力や、常に自分を振り返って意味を読み解き、それでいいのかと自問自答する姿勢、これらはコンピテンシー・ベースの教育や21世紀型スキルの中でも重要視されています。（斉藤）」具体的な授業を提供された斉藤先生の話の直に聞き、コンテンツ・ベースからコンピテンシー・ベースという教育の原理転換を図る授業実践から話が始まったのであった。その充実した時間を参加者の一員として共有できたことは幸せであった。



2 日目は、この本の第 1 章から各自読后感想発表者が発表した。
以下が主な感想である。

第 1 章「知識基盤社会への転換があったから教育の原理を変える
というのなら、またいつの日か社会が構造転換を遂げたとき、教育
もそれに追従して変化すべきだ。」「知識基盤社会への移行を好機と
とらえ、いくぶんなりとも普遍性ある教育論を打ち立てられるよう
努力すべきであろう。我々には資質・能力の育成という具体的な授

業実践およびカリキュラム実践の蓄積がある。」

第 2 章「日本は独自の方法でしっかりとコンピテンシー・ベイスの授業作りをやってきたこと、
その先導役として、日本個性化学会が存在していること、自分の今までの方向性は間違っていない
と確認でき、明日からも胸を張って子どもたちに向き合う事が出来る。」

第 5 章は、「知識基盤社会の教育を創造する多様な挑戦」と
銘打ち様々な我々にとってはなじみ深い実践が載っていた。共
感できるところが多く「その通り」「実践の子どもの様子に実
感する」ことが多かった。「習得すべき内容を知る事を最終目
標とするのではない。」「共通して教える事で同じ土俵に立てる
ようにする。」「理解力の違いが出てくることを充分考慮する。」
等読みの深さを実感できた研修となった。(文責 多田)



<第 8 回全国大会のお知らせ>

第 8 回全国大会は、関西個性化教育学会を中心に、以下の日程で開催の準備を進めていただい
ております。なお、詳細につきましては、最終案内（2015 年 5 月頃）としてご案内申し上げます。

開催地：兵庫県神戸市 会場：神戸国際大学

開催日：平成 27 年 8 月 8 日（土）～9 日（日）

※なお、合わせて開催の免許更新講習 B 講習 8 月 7 日（金）～ 9 日（日）

※内 8 日（土）9 日（日）は大会に参加

A 講習 8 月 10 日（月）～11 日（火）

※会費の未納が多くなっています。このままですと運営に支障が出ることも考えられます。
ご協力をお願いします。

<事務局への問い合わせ・連絡先>

庶務部長 佐久間 茂和

〒338-0013 埼玉県さいたま市中央区鈴谷 3-9-14-510

TEL 048-678-1681

e-mail sakuma.a@s7.dion.ne.jp

日本個性化教育学会ホームページ

<http://koseika.com/>

日本個性化教育学会 第 25 号

平成 27 年 2 月 15 日発行

編集責任者 事務局長 奈須 正裕

編集 広報部 多田 信夫